生徒向け校長通信 ～ 名言にちなんだエッセイです

あうん

教師と生徒・保護者があうんの呼吸で教育ができることを願って‥‥

第 ２８ 号
令和５年１月３１日

女性にはすべて、この無慈悲な兎が一匹住んでゐるし、男性には、あの善良な狸がいつも溺れかかつてあがいてゐる。

太宰治『お伽草紙』

「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」。誰もが知っている昔話も太宰治(1909-48)の手にかかったら…。親しみやすい語り口に諷刺とおどけをしのばせ、天性の喜劇作家がおなじみの説話の世界を自由奔放に換骨奪胎。

（「BOOK」データベースより転載）

今年も書道部校外展に出品させてもらいました。その年の干支を書かせていただいていますが、今年は「卯」。いろんな書体を試してはダメ、を繰り返していました。最後に松岡先生に見ていただいたところ、ダメと思って捨てていたものを見るなり、「これ、いいじゃないですか」と取り上げて、さらに素敵な額を選んでくださってりっぱな「書」にしていただきました。写真では見にくいと思いますが、書の縁取りには赤が用いられています。これが兎を連想させるアクセントとなっています。重ね重ね感謝です。

さて、こちらも新年恒例の干支にちなんだ文学紹介です。ウサギは昔話によく登場します。有名な「うさぎと亀」ですが、あれはイソップ物語から。「月のうさぎ」のお話も『今昔物語』にありますが、もともとインドの仏教説話だそうです。古く『古事記』には「因幡の白兎」のお話があります。隠岐の島に住む１羽のうさぎは、海の向うの因幡に渡りたいと考え、ワニ（サメのこと）をだましてまんまと因幡の国に渡ります。怒ったワニはウサギの毛皮をはいでしまいます。泣いていたウサギを助けたのが後の大黒様、というお話です。

もう一つ、皆さんもご存じかと思いますが、「カチカチ山」があります。お婆さんを残虐に殴り殺したタヌキを、お爺さんに代わってウサギが成敗するという話ですね。内容があまりにも残酷なために、時代の経過とともに、少しずつどぎつい内容ではなくなってきたようで、現代の子供向け童話にはお婆さんは登場せず、最後は狸も改心するという、めでたしめでたしの結末になっているものさえあります。

そんな中、太宰治は彼なりの解決方法に出ます。太宰が手にした「カチカチ山」は「狸が婆さんに怪我をさせて逃げたなんて工合に、賢明にごまかしている」もので、「たつたそれだけの悪戯に対する懲罰としてはどうも、兎の仕打ちは、執拗すぎる」といって、彼なりの「カチカチ山」を生み出すのです。そこでは、ウサギは 16 歳の美少女、そして狸はウサギに一方的に好意をよせる醜男の中年という設定になります。そうすると、何とこの矛盾が解決してしまうではありませんか。詳細は読んでいただくとして、多くの男性諸君がつい感情移入してしまうこと必至。狸の言葉「惚れたが悪いか」が切なすぎます。

太宰は最後にこう締めくくります。

女性にはすべて、この無慈悲な兎が一匹住んでゐるし、男性には、あの善良な狸がいつも溺れかかつてあがいてゐる。

今は「女性は」「男性は」とひとくくりに言わない時代ですが、人生長く生きていると太宰のこの言葉に頷きたくなる自分がいるのも事実です。

太宰治『お伽草紙』～昔話のオマージュ。抱腹絶倒、目から鱗の一冊です。